（３）②様式第３号－２（報告書）

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。
※必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

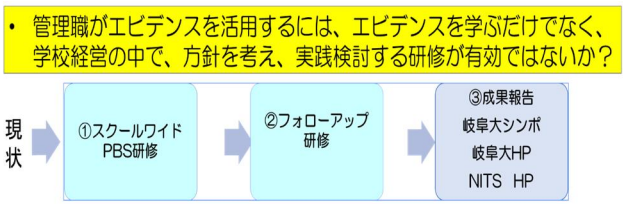
NITS・教職大学院・教育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 岐阜大学教職大学院
	事業名：【NITS・岐阜大学教職大学院コラボ研修】 ポジティブな学校文化をつくるエビデンスを活用する管理職研修
	研修等名：【NITS・岐阜大学教職大学院コラボ研修】 ポジティブな学校文化をつくるエビデンスを活用する管理職研修
	開催日時：令和６年８月 20 日（火）13 時～15 時、12 月 23 日（月）13 時～15 時、令和７年２月３日（月）13 時～15 時 50 分 開催場所：岐阜大学（ZOOM 会議システムによるオンライン研修） 参加人数（総数）と参加者の属性：校長 12 人、校内担当者 12 人

目的：

今日、不登校やいじめ、特別な支援を必要とする子どもの増加を受けて、管理職が教職員と協働して、多様な子どもが安心して学べるポジティブな学校文化を構築することが緊喫の課題となっている。その課題を解決するために、全ての子どものよさ（望ましい行動）に注目し、それを引き出し、認め合う仕組みをつくるスクールワイド PBS のエビデンスが注目される。

本事業では、管理職が教職員と協働して、多様な子どもが安心して学べるポジティブな学校文化をつくるために、スクールワイド PBS を学び、活用するための研修を開発した。

内容：研修受講者（研究協力者）：山県市小学校９校・中学校３校の校長先生（及び校内担当者）



①スクールワイドPBS研修

全ての児童生徒を対象として、学校を安全で効果的な学習環境とするために必要な社会的文化や個別の行動支援を確立するシステムアプローチ、学校組織がエビデンスを活用する枠組み（Sugai & Horner, 2009）

子どものよさ（望ましい行動）に注目し、それを引き出す環境を整え、認め合い、成長を喜ぶ仕組み

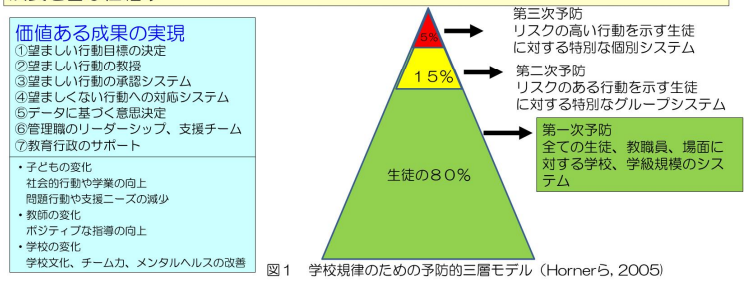


図１　学校規律のための予防的三層モデル（Hornerら, 2005）

①スクールワイド PBS 研修
８月 20 日（火）13 時～15 時
第１部　スクールワイド PBS の講義とモデル校実践報告
講師　岐阜大学教職大学院（平澤紀子教授、原尚特任教授、古賀英一特任教授）、山県市教育長　服部和也氏、教育委員会担当者　土田哲也氏、小学校モデル　大村統子氏、中学校モデル　伊藤泰介氏
第２部　グループワーク：自校の充実策の作成
第３部　全体交流・まとめ

②フォローアップ研修　12 月 23 日（月）13 時～15 時
各校の実践成果を報告交流し、管理職がどのようにエビデンスを活用できるかを検討した。

③成果報告　令和７年２月３日（月）13 時～15 時 50 分
「ポジティブな学校文化をつくるエビデンスの活用」を実施した。全国の大学、学校、教育委員会、市民等 264 名が登録し、活発な討論がなされた。（第 1 部基調講演「管理職研修の高度化と教職大学院の役割」（文部科学省総合教育政策局長　茂里毅氏）、第２部事業報告、第３部参加者交流）

成果：

①全体的満足度：10 点中 8.6 点
②研修で得られたこと：「知識」「自校の充実策」のいずれも「得られた」「ある程度得られた」と回答された。
③校長先生の取り組みの変化：「大切にすること」「具体的な姿や手立て」「認め合い」の仕組みを充実させた。

④実践により変化したこと：校長先生の見通しや自信、教職員のポジティブな子ども理解や支援、子どもの主体的な取り組み、チーム力のいずれにおいても「変化した」「ある程度変化した」と捉えていた。
⑤児童生徒による学校生活アンケート（若林他作成）：校長先生の実践と対応した「目標やルールの明確化」「先生は児童生徒を大切にしている」「児童生徒は認め合っている」の評価点が有意に向上した。
⑥研修受講者の気づき、考察
・「何をよさ」と捉えるかで学校は大きく違う、目指す姿や現状を踏まえた方針が重要である。
・「よさみつけ」を軸にポジティブな学校づくりに取り組んでいたが、手探りであった。エビデンスを活用し、学校経営の妥当性を確認し、充実策を明確にすることが重要である。
・いくら有効なエビデンスがあっても、自校の教育を充実する方針がなければ、役にたたない。管理職はエビデンスの本質を見極め、取り組み方針を明確にすることが重要である。
・子どもの教育成果は見えにくく、ゆえに手応えもわかりにくい。データを基に必要な取り組みを明確にし、その推進状況を可視化すると、子どもと教員とともに考え、充実できる。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

本研修では、管理職の問題意識からの学びを重視し、実践の省察から気づきを得て、他者との交流で深め、それを実践に生かすという探求型研修を意図した。本研修に関する受講者の評価や気づき（前述の成果）をみると、本研修の意図は達成されたことがわかる。同時に、研修担当者は校長先生の気づきや指摘に触発された。エビデンスの教育的価値を明らかにしないと、自校の教育に活用できないという問題提起は重要な視点である。研修担当者が校長先生の気づきを捉え、共有知となるような学びの相互作用を追求したい。

アイディアや工夫したこと： ①エビデンスを知り、自校の充実策を考え、成果を報告し、交流する学び

②自校の充実策を考えるワークシート

<8月20日研修>
①現在、ポジティブな学校文化をつくるために取り組んでいること
研修前に記入しておいてください。
・

②現在の取り組みを、スクールワイド PBS の観点から振り返ってみましょう。

スクールワイド PBS の観点	前	後
①学校経営、教育目標等から現在の取り組みの大切さを明らかにしている		
②なぜ、取り組むとよいのかを教職員や子どもに伝えている		
③大切にしたいことを具体的な姿と手立てとして示している		
④大切にしたいことを実現するために推進チームをつくっている		
⑤推進チームが校内に提案しやすいようにしている		
⑥教職員が負担なく学び、実行できる計画をつくっている		
⑦子どもが負担なく学び、実行できる計画をつくっている		
⑧取り組みを可視化し、認め合い、検討する方法を明らかにしている		
⑨子ども、教職員、地域と成果を共有する方法を明らかにしている		
⑩成果を次年度に引き継ぐ方法を明らかにしている		

1 行っていない　2 あまり行っていない　3 ある程度行っている　4 行っている

③自校の充実策
スクールワイド PBS の観点から、現在の取り組みで充実できそうなこと
研修日に作成しますが、予め記入いただいてけっこうです。
・

<12月23日研修>
④充実策の成果は？
・

⑤管理職はエビデンスをどう活用すればよいか？
・